

奄美大島宇検村における墓の共同化に関する文化人類学的研究

著者	福ヶ迫 加那
ファイル(説明)	博士論文要約 博士論文要旨 最終試験結果の要旨 論文審査の要旨
学位授与番号	17701甲人社研第34号
URL	http://hdl.handle.net/10232/00029564

学位論文の要旨	
氏名	福ヶ迫 加那
学位論文題目	奄美大島宇検村における墓の共同化に関する文化人類学的研究
<p>本論文は、地域社会が墓とどのように関わっているのかという視点から、鹿児島県奄美大島における1970年代以降の墓制の変化について、その過程と要因を明らかにすることを目的としている。具体的には、奄美大島南西部に位置する宇検村の墓の共同化を対象とした。宇検村における墓の共同化とは、親族、家族ではなく、集落が主体となって共同納骨堂の建設と維持管理に参加するありようを指す。この現象の今日的意味について、集落の共同納骨堂が建設される過程や維持管理、利用状況といった側面から検討する。本論文の構成は以下の通りである。</p> <p>序章では、社会変化と墓制の変化に関する先行研究のうち、遺骨と墓の管理を集約する形態をとる共同墓を扱った研究を中心に整理し、これに基づき本研究で取り上げる共同納骨堂の特徴と、本研究の位置づけを提示した。その上で、調査地として宇検村を選択する意義と研究方法、論文構成について述べた。</p> <p>第1章では、調査地である宇検村の概況と葬墓制の概要、宇検村内の各集落の共同納骨堂について基礎的な情報を提示した。宇検村では、本土復帰後の急激な社会変動のもと、1972年から2016年までの間に14集落中9集落に共同納骨堂が建設されるに至った。この動向を把握するため、9集落の共同納骨堂すべてについて、その基礎的情報を整理した。その結果、各集落は、先行する複数の共同納骨堂を参考にしながら、財政や人口等に見合った形式を選んでおり、それぞれに適した形に調整してきた。加えて、各集落に共通するのは、墓や墓を介した祭祀に関する問題を、集落の問題として捉え、対処しようとする姿勢である。家族・親族よりも確実性が高いと考えられている集落が、墓管理のサポート役として選ばれていると指摘した。</p> <p>第2章では、他集落に先駆けて墓の共同化を成し遂げた田検集落を取り上げ、その要因を多角的に検討した。その上で、集落にとって墓の共同化がどのような意味を持つものであるのかを、当時の集落の社会状況と関連させながら考察した。田検集落では、本土復帰後に生じた人口流出が在住者と他出者の双方に無縁化の可能性を想起させ、同時期に家墓造立に要する経済的負担の軽減が望まれていたことによって墓の共同化が案出された。こ</p>	

の案が早期実現したのには、理念的な共有にとどまらず、コンクリート建築の技術者のサポートがあったことも影響した。さらに田検集落の場合は、墓の共同化がなされる以前に、過疎化に対する具体的手立てとして集落合同で子どもの誕生を祝う行事が創出されていた点に注目し、これを共同化の先例と位置付けた。いずれの取り組みにも共通するのは、集落の中心となる現行世代が抱えていた諸問題を、次世代や前世代への働きかけを通して改善していくという集落の運営方法であることを示した。

第3章では、田検集落との対比において、共同納骨堂の建設時期、資金や集落の規模、人口構成等の点で特徴的な湯湾集落の事例を取り上げた。湯湾では1回目の計画は合意に至らなかったものの、再び計画がなされ完成に至った。今回の合意形成の過程とその阻害要因を検討した。一方、今回の合意形成の過程においては、共同納骨堂の利用条件を整備するなかで、他出者や入込者をどこまで「集落民」と見なすかという検討がなされ、期せずして「集落民」の定義を現出させたのではないかと指摘した。

第4章では、共同納骨堂建設を支える要因について、共同納骨堂を建設していない集落と、建設計画の停滞を経て急速に進展した集落に分けて検討した。共同納骨堂建設を行わない集落に共通していたのが、建設にかかる資金確保の困難であった。さらに維持管理の共同化に代表される共同納骨堂の利点だけでなく、参拝スペースの集合化により墓が他人任せになる懸念があるという欠点等も考慮されていることが分かった。建設が急速に進んだ事例については、集落の規模や資金といった諸条件に合致するモデルを選び、適合させていく過程を確認できた。この資金の軽減化は、行政からの補助金と先駆的モデルの存在があった宇検村の集落にとって、さらなる追い風となった。

第5章では、共同納骨堂がどのように維持管理され、利用されていくのかという視点から、管理主体の変化や墓参様式の変化、他出者の利用動向に焦点を当て分析した。管理主体の変化として世代交代に着目した田検集落の事例では、建設から33年目に、建設当時と同じく集落民の労力奉仕によって施設の改修が行われた。次世代主体の改修工事を通して、墓をともに守っていくという意識の共同性が、更新されたと考えられることを指摘した。また、参拝スペースの集合化という施設形態の変化は、維持管理の面では利便性を高め、管理の担い手を幅広く確保したが、これによって墓参様式の変化をもたらした。他方で、他出者と故郷の墓の関係性を検討した結果、他出者と故郷をつなぐ結節点としての働きを看取できた。ただし、故郷の共同納骨堂が先行世代の納骨場所として意識されているものの、当事者世代についてはあくまで子どもたちの近くにあることが望まれており、故郷の墓をいつまで志向するかという問題が生じる可能性を示した。

考察と結論では、以上を総括して本論文の意義を再確認した。